研究発表　分科会 9-2　言説と批評 10 月 15 日（日）16：25-17：05　南館 2B41

雑誌『美術新報』が紹介した作家たち
―― 人選とその意味

千葉大学　日比野 未夢

本発表の目的は、雑誌『美術新報』(画報社、1902-1920 年）が美術に関する情報提供を主としながら、暗にオピニオンを発信していた実態を明らかにすることにある。同誌は「通信機関」を自負し、美術作品、作家、展覧会などの情報提供に尽力した。特に、坂井犀水（1871-1940）が編集主幹を務めた 1909 年から 1915 年までは美術の最新動向を報せる同誌の特徴が遺憾無く発揮されている。北澤憲昭は、『美術新報』刊行当時の日本美術界には新旧両派の対立があったが、同誌は「新派系旧派系の双方に程よく目配りがなされている」と評価する（「美術雑誌にみる明治美術の諸相⑤―明治から大正へ」『日本の美術』第 353 号、至文堂、1995 年 10 月、92 頁)。一方、今橋映子は「主眼はあくまでも同時代日本の美術の新動向、とりわけ工芸、装飾、建築、都市にまで及ぶ「美術概念の拡張」にあった」と指摘する（第十章『美術新報』改革とその戦略（19091913)」『近代日本の美術思想―美術批評家・岩村透とその時代』(上)、白水社、2021 年、444 頁)。先行研究をふまえ発表者は、同誌が情報提供とオピニオンの発信を両立した実態を解明し、その編集方針の効果について検討を試みる。

この試みのために、編集主幹の坂井犀水が自ら筆をとって同時代日本国内の作家を各回に一人ずつ紹介した巻頭連載「現今の大家」(全 18 回)、「新時代の作家」(全 8 回)、「現今の作家」(全 6 回）の人選傾向を明らかにし、その意味を考察する。まず、改めて同誌が特定の流派団体に偏っていないかを検証するべく、連載全体におよぶ量的な傾向分析にくわえて個別の人選に着目する。たとえば、同誌編集部が西洋画新派の白馬会と太い人的繋がりをもちながら、連載第一回に旧派の太平洋画会系の作家である吉田博（1876-1950）を選出した意図を検討する。つぎに、連載記事を各作家の選出理由に着目して精読する。日本初の官設公募展覧会として開設された文部省美術展覧会における成績にくわえて、一般認知度や人気を根拠とする時事的な選出がみられることを指摘する。さいごに、文展での成績や認知度、人気を度外視した人選に着目し、その頻度と各選出理由を分析する。このとき、各作家の生い立ちや人格に言及していることに留意する。その上で、「新時代の作家」として工芸作家の香取秀眞（1874-1954）を紹介したことに注目する。

以上の検討を中心に、『美術新報』が時事性の強い作家の紹介を主旨とする巻頭連載において、時折その主旨からはずれた別の目的で人選をおこなっていた実態を明らかにする。くわえて、連載を通して理想の作家像を示していたことも指摘する。そして、同誌の読者が、時宜にかなった情報を迅速に報せる『美術新報』に対する期待を背景に、同誌が提示した作家像に耳を傾けた事情とその可能性について論じたい。